

# クインズランド大学アジア言語研究学科 フォーラムでの講演報告

池田魯參

私は、1998年2月14日から3月17日までの1ヶ月間、第13回クインズランド大学短期英語セミナーの引率教員として、32名の参加学生と一緒に、オーストラリア国クインズランド州ブリスベン市に滞在した。この間、3月5日（木）の午前10時30分から12時の間、クインズランド大学アジア言語研究学科のフォーラムのゲストスピーカーとして、『般若心経』に関する講演を行う機会を得た。

大学では仏教の話はほとんどなじみがないということもあって、講演前にあらかじめ講演の内容を原稿にまとめ、こういう話をするつもりであると申し上げたところ、原稿の表現がどういう意味なのか、どう解すべきなのかという点をめぐって照会があり、通訳を担当する学生とも2回ほど事前の打ち合わせが行なわれて、当日の講演を迎えることになったのである。

打ち合わせを通じて、伝統も文化も違う外国語の話一般聴衆に向けて正確に通訳して正しく伝えるという仕事がどれほど大変なことか、その困難さが私にも身にしみて分かったのである。こんなに手間をかけて翻訳するのだから、皆さんが作った通訳用の翻訳原稿を私にも一部分けて下さいとお願いしておいたのであるが、その後、3ヶ月近くがすぎようとしていた1日、約束をたがわずに、担当教授のユキ・セイ先生を介して、訳文原稿が送られて来た。折角のことでもあり、私の報告をも兼ねて、学生諸君が読む機会も多い本誌に、私の講演原稿と合わせて、クインズランド大学の学生諸君が作った英訳文を掲載し、学生諸君の勉強の参考に供したいと考える。私信を掲載するのは失礼とも考えたが、講演原稿の翻訳の御苦勞が伺われるので、セイ先生のお許しを頂き、先生のお手紙の全文も掲載させて頂いた。

[演 題]

# 大海原を越え熱砂を越えて来た仏の教え

## —— 摩訶般若波羅蜜多心經 ——

池 田 魯 參

般若心經は、日本人であれば誰れでも知っている有名なお経です。例えば、西国88ヶ所の寺々にお参りして、お遍路さんが読誦するのはこのお経ですし、身近にお守りとして持ったり、あるいは写経のお経として尊ばれています。

なぜこんなに有名になったのかといいますと、恐らく、このお経がわずか276文字で書かれた短いお経であり、小さな経文の中に大乘仏教の教えが要領よく凝縮されていたからだと思います。また、「観自在菩薩」と始まるように、観音さまのお経として喜ばれました。あるいは、「色即是空」という名句で知られているように、大乘仏教の空の教えを示したお経として有名です。さらには、「羯諦 羯諦」の呪文がある密教のお経として活用されました。

そこで今日は、先ず、般若心經がどのようにして成立したかについて考え、次に、般若心經が禅宗にどのように受け容れられたのかについて考え、最後に、日本の道元がどのように般若心經を解釈したか、という3点にしぼって、仏教の代表的な経典の1つである般若心經の世界の一端についてお話してみたいと思います。

般若心經はいつ作られたのか、といいますと、はっきりしたことはわかりませんが、2～3世紀頃には作られたと考えられます。それは、「八宗の祖」と称えられる竜樹りゅうじゆ（ナーガールジュナ・150—250年頃）の時代に当たります。中国の古い「訳経目録」によりますと、223年頃に般若心經が訳されたこととなります。これが最初の漢訳ということになります。

現存しているものとしては、鳩摩羅什くまらじゆう訳（クマラジーバ・402—412訳）『摩訶般若波羅蜜大明呪經』があります。これは玄奘がインド旅行の途次で読誦したお経と思われます。この後、250年近くが経って、玄奘が『摩訶般若波羅蜜多心經』を訳出（649）します。いうまでもなく大勢の人々が読誦し、研究して来たのは玄奘が訳したこの般若心經です。

玄奘げんじょうという人(602—664)は、子供に人気がある『西遊記』せいゆうきに登場する三蔵法師で、中国の伝統芸能である京劇きょうげきの『孫悟空』そんごくうにも登場するあの有名な人物です。もともと「三蔵法師」さんぞうほうしというのは一般名詞で、経(スートラ・ほとけの教え)・律(ヴィナヤ・きまり)・論(アビダルマ・経と律の解説)の三蔵(トリピタカ・三つの容れ物・書物)に精通した法師(仏教学者)という意味です。したがって、三蔵法師と呼ばれる人は沢山いるわけですが、単に三蔵法師といえば玄奘を指すほどで、現代の中国でも国民的な英雄の一人として人民に敬愛されています。

玄奘は、28歳(629)のとき、本格的な仏教を学ぼうとして、単身でインドを目指し中国から密出国しました。それからなんと17年間にも及ぶ天竺てんじくへの旅を続けたのです。玄奘は、壮健な体力に恵まれ、強靱な精神力をそなえた、とても魅力的な人物でした。彼は行く先々の国で多くの人々と出会い、親密な人間関係を築き、人々を仏教の信仰へ導きました。帰国後、勅命によって書いた『大唐西域記』だいとうさいいき十巻には、西域諸国の地理や仏跡、人々の暮らしぶりなどが細かく記録されていて、玄奘の旅の詳細が知られます。

インドでは、ナーランダ寺の戒賢(シーラバドラ)に師事し、唯識ゆいしき教学の根本聖典である『瑜伽師地論』ゆがしじろん(ヨガーチャラブフーミ)百巻外の仏教学を学びました。戒日(ハルシャバルダナ)の帰依を受け、王の後援の下で梵本657部を収集し、はるばる中国へと伝えました。帰国後は、唐朝の太宗たいそうと高宗こうそうの二帝の帰依を受け、帝都の長安ちやうあんの大慈恩寺(今日、大雁塔と呼ばれ、西安市の象徴になっている)を中心に、亡くなるまでの18年間を、専ら仏典の翻訳に努め、群を抜く訳経事業を行ったのです。

般若心経は、終南山翠微宮で649年5月24日に訳されました。今世紀初め、燉煌とんこうの石窟から『唐梵翻对字音般若波羅蜜多心経』とうぼんほんたいじおんが発見されました。原本は、大英博物館に保管されていますが、原文は、『大正新修大蔵経』たいしやうしんしやうだいぞうきやう第8巻に収録されています。これには玄奘の弟子の基き(632~682)が書いた「序文」も付いていて、経題の下には「この般若心経は観自在菩薩が玄奘に直接、授けた梵本であり、一字たりとも改ざんするようなことはしていない」と記しています。この本は、般若心経の原文の発音に最も近い漢字で写し取っていますから、今日でも、漢字の発音から般若心経の原文を復元することができるのです。中国では漢訳が完成すると梵本の方は捨てられてしまうのが一般的なので

(26) クインズランド大学アジア言語研究学科フォーラムでの講演報告(池田)

すが、般若心経はこうして残されたわけで例外であったということになります。般若心経が特別なお経とみなされていた証拠です。

ところで、玄奘の没後に著わされた『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』(688)と題する玄奘の伝記では、一人で熱砂の中を越えていった孤独で困難な旅の日々が印象深く記されています。そういう状況の中で、玄奘はひたすら「観音菩薩と、般若心経を念ずる」ことによって困難を乗り越えることができた、といます。玄奘が旅の最中に何度も口ずさんだという般若心経はきっと鳩摩羅什訳のようなお経であったろうと推定できます。最近、アメリカの仏教学者のジャン・ナティエ氏(インディアナ大学)は、玄奘はインド留学中に漢訳般若心経から、逆に梵本般若心経を作ったのではないかという大変、興味深い問題を提起しました。「観自在菩薩が玄奘に親しく教授した梵本」というのは、あるいはそういうことを意味しているのかも知れません。

玄奘訳の般若心経が現われますと、玄奘の弟子たちがすぐに研究を初め、まもなく各宗に流行していきました。なかでも禅宗の人たちが示した態度は興味深いものがあります。

長安の都で玄奘とその弟子たちが活躍した時代は、禅宗の五祖の弘忍(601—674)や六祖の慧能(638—713)が活躍した時代であり、禅宗教団が飛躍的に教線を拡張した時代でした。坐禅を修行の中心に置いた禅宗では、坐禅の修行を通して文字や言葉の中に込められている仏の本当の心を把握することこそが大事なことであったと考えました。弘忍や慧能の頃になると、そういう仏の心は『金剛般若経』などの般若経典が強調している空の教えを理解することによって深めていかなければいけないと考えるようになりました。禅宗では、こういう仏の心を真剣な仏道修行を通して師から弟子へと誤りなく伝えていくことを「以心伝心」と表現し理想化するわけです。

ちょうど新たな進展をとげようとしていた禅宗の人たちにとって、玄奘訳般若心経はまさに格好のお経でした。なぜなら「般若の心の経」というお経の題名は、「仏語(仏の言葉)の心を宗(根本)となす」(『楞伽経』に出る語)という立場をとって来た禅宗の人たちには何の説明もいらなかったからです。鳩摩羅什訳では「大明呪経」とあり、大きな智慧の「言葉」と訳されていましたが、玄奘訳では「心経」と訳され、言葉から「心」へと教説の重点が移っていたからです。

そこで、禅宗の人たちは、般若心経は「諸法空相」(すべては空である)という「摩訶般若波羅蜜多」(大いなる智慧の完成)は「心無罣礙」(なにものにもとらわれない心)を実現することを教えていると解したのです。

中国の禅宗の歴史の中で定着した般若心経の重要性は、最初期に中国から日本へと禅宗を伝えた道元によって評価されました。道元(1200～1253)は、オーストラリアではほとんど知られていないと思いますが、日本を代表する宗教家、哲学者として重要な人物です。例えば、ノーベル文学賞を受賞した川端康成氏は、「美しい日本の私」と題する記念講演の中で、「春は花夏ほととぎす秋は月、冬雪さえてすずしかりけり」という道元が作った和歌を引用したほどです。また、二人目のノーベル文学賞の受賞者となった大江健三郎氏は、最近、ある環境問題の講演の中で、知的障害を持った息子(大江光氏は作曲家として知られる)ときちっと向き合わなければならない事態になり、そうすることの意味を「仏に礙えられる」という道元の言葉によって深めることができたと言っているほどです。

道元は、主著の『正法眼蔵』「摩訶般若波羅蜜」巻(1233)で、般若心経をどう読むべきか説明しています。この著述は、日本における般若心経の仮名書きの注釈書の最初のものとして注目されるばかりでなく、道元の最初期の著述であることから、道元が若い頃から般若心経に関心を持っていたことがわかります。

道元はこの巻で、五年に及ぶ中国留学(1223—1227)で大きな影響を受けた恩師の如浄が作った「風鈴頌」を引用し、般若心経の心を提示しています。その頌は次のように七言四句の詩偈です。

渾身口に似て虚空にかかる／東西南北の風を問わず／一等に他の為に般若を談ず／滴丁東了滴丁東

(全身を口のようにして空中にさがっている／どの方向からふいて来た風でもおかまいなしに／どの人にも同じように智慧の教えを説く／チチン・ツン・リャン・チチン・ツン)

道元はこの如浄の頌を引用して、般若心経の最後にある「是大神呪 是大明呪 是無上呪 は無等々呪」(般若波羅蜜多は、大変不思議な言葉であり、大いなる智慧の言葉であり、この上なき言葉であり、並ぶもののない言葉である)という四句の解釈に変えるのです。そして、この頌の意味を、「これが仏

(28) クインズランド大学アジア言語研究学科フォーラムでの講演報告(池田)

や祖師が伝えて来た般若(智慧)の説き方である。全身が般若であり(第一句)、他人も般若であり(第二句)、自分も般若であり(第三句)、すべてが般若である(第四句)」と解釈しています。

般若心経には、無の字が21回、不の字が9回、空の字が7回使われています。276文字のなかで、無・不・空という否定的な表現の文字が全部で37回使われていることとなります。般若心経を理解しようとするときに誰もがこれらの語句をどう解釈したらいいのか苦労するのですが、道元はこれらの語句を単なる否定の意味では読んでいません。むしろ「施設<sup>せせつ</sup>可得<sup>かどく</sup>の般若」(いくらでも表現が可能な智慧)として解するのです。

なぜこういう解釈になるのか、その理由を細かく説明する余裕はありませんが、一口でいうと、「いくらでも表現ができる智慧」とは、道元においては、ものにそう影のように、いつでもどこでも、はたらきづめにはたらいっている仏の慈悲の心にほかならなかつたということです。

般若心経が無や不や空の語で、あれでもない、これでもない、ないない尽しの表現によってくり返し説くことによって、空の智慧(慈悲)の種が根を下ろし、やがては芽を出し成育し、ついには花を咲かせ、果実を実らせることになるというのです。般若心経が私たちに語りかけているのは、なにごとにもとらわれない、なにものにもこだわらない、空の智慧(慈悲)の世界に生きなければいけない、ということだ、というのです。どんなに努力していても努力しているという意識にとらわれない、成功を誉り、成功におぼれ、成功に汚れてしまうことがない、そういう虚空大の人生を生きなければいけない、風鈴がリンリンと無心に鳴っているように、いつでも、どこでも、みんな一緒にいきいきと生きていかなければいけない、と般若心経は教えている、とそう道元は解するのです。如何(いかに)?

1998年5月29日

池田先生,

大変御無沙汰しております。その後お変わりございませんでしょうか。先日は、先生がお書きになった御本を何冊もわざわざお送り下さいまして、誠にありがとうございました。学生たちも私も大変嬉しく頂きました。

又、ブリスベンにおいでになった時は、ご多忙にもかかわらず、クインズランド大学アジア言語・研究学科のフォーラムのゲスト・スピーカーとしておいで頂き、大変お世話になりました。先生のご講演を通訳する機会を得ましたことは学生にとって大変貴重な経験になったことと存じます。尚、学生の準備のため原稿をお書きになり、上谷と河合にまでご馳走して下さいました由、本当にご迷惑をおかけしました。大変申し訳ございません。

学生はそれ以来数カ月かけて学業の合間に先生の原稿の英訳に勤めて参りました。いよいよでき上がりましたのでお送り致します。但し、学生たちはだれも英語が母国語でもありません。私は数回目を通して、学生の英語を直して見ましたが、その訳を完全に書き直す訳にもいきませんし、どちらも仏教の専門家でもございませんので、完璧な訳ではないと存じますが、ご了承下さいませ。しかし、学生たちは英語が母国語でもなく、専門の翻訳家でもないにもかかわらず、ベストを尽くしたと考えて頂ければ幸いです。

今後ともどうぞよろしくお願い致します。まずは簡単ながらお礼の言葉まで。

Yuki Sayy

## *The Teachings of Buddha — From Across the Ocean and Burning Sand*

*Professor Rosan Ikeda*

*Prajñāpāramitāhṛdaya-sūtra*-the Heart Sūtra-is a celebrated sūtra with which the Japanese are very familiar. For example, it is this sūtra which pilgrims chant when they visit the eighty-eight famous temples on Shikoku island, the sūtra Japanese people keep on themselves as an amulet or the sūtra which is held in high esteem and is frequently copied by hand.

This sūtra became so well-known to the Japanese because it is comprised of only 276 letters and Mahāyāna Buddhist teachings are well-condensed in this short sūtra. Furthermore, this has been well received as a sūtra of the Goddess of Mercy, Kwannon. Being known as a phrase of *Shikisokuzeku* which means voidness, this sūtra is also famous as one which preaches the teachings of 「空」 “kū” (emptiness), and has been adopted into the secret teaching ; i.e. esoteric Buddhism which is known for a spell of *Gyatei Gyatei*, meaning “gone”.

I am going to break my speech into three parts, giving some insight into the world of the Heart Sūtra, a typical Buddhist sūtra. Firstly, I would like to touch on how the Heart Sūtra was formed, then I am going to talk about how this became adopted to Zenshū ; a Buddhist sect, and finally I will explain how the Japanese Buddhist monk, Dogen interpreted this.

It is unclear when the Heart Sūtra was written. However, it is said to be around the second or third century A.D. That is, it dates back to the period



of Nāgārjuna between the middle of the first century A.D. and the middle of the second century A.D. Nāgārjuna was admired as the founder of eight schools of Buddhism. According to an ancient Chinese catalogue of sūtra translation, the Heart Sūtra was translated in Classical Chinese for the first time around 223.

Another translation of the Heart Sūtra *Makahannyaharamitsudaimyōjukyo*, translated by Kumārajīva 402 and 412, still exists today. This sūtra is thought to have been chanted by Hsuan-chuang on his way to India. About 250 years after Kumārajīva's translation, the Heart Sūtra was translated by Hsuan-chuang in 649. It is Hsuan-chuang's translation of the sūtra that many people chant and study.

Hsuan-chuang is a figure who appears as a tripiṭaka Buddhist monk in the Chinese novel of "The Journey To The West", a story which is popular among children. He also appears in a classical Chinese opera, "Wu-Kung" which is traditional Chinese entertainment. Tripiṭaka is a common noun meaning a monk who is well-versed in tripiṭaka. Tripiṭaka which originally means 'box', 'basket' or 'books' denotes three things; the first is sūtra i.e. Buddha's teachings, the second is vinaya i.e. the rules of discipline, and the third is Abhidharma i.e. a commentary on sūtra and vinaya. This means many monks are referred to as tripiṭaka Buddhist monks, but since Hsuan-chuang is such a wellknown figure the term for tripiṭaka Buddhist monk usually refers to Hsuan-chuang who is still beloved as a hero in contemporary China.

To study true Buddhism, Hsuan-chuang left China for India illegally and alone when he was 28 years old. This journey ended up taking as long as 17 years before he could return to China. Hsuan-chuang was a very attractive person, gifted with good health and strong mental powers. He established close relationships with a number of people he met during his journey and

(32) クインズランド大学アジア言語研究学科フォーラムでの講演報告(池田)

led them to the Buddhist faith. After he returned to China, he wrote by Imperial order *Daito-saiiki-ki*, which consists of 10 volumes. The title means 'journal of regions to the west of the Great T'ang Empire'. This book, in which he recorded details of geography, Buddhist holy places, and the life of people in Central Asia and India, tells us about his journey in detail.

In India, Hsuan-chuang studied under Śīlabhadra of the Nalanda Monastery. While there he studied the *Yogācāra-bhūmi*, one of the basic sacred treatises of the Yogācāra School which consists of 100 volumes. Under the patronage of King Harshavardhana, he collected 657 manuscripts of Sanskrit Buddhism scriptures and brought them back to China. On his return to China, under the patronage of two emperors of the T'ang Dynasty, T'ai-tsung and Kao-tsung, he dedicated the last 18 years of his life to the translation of Buddhist sūtras. He worked mainly at the Ta tz'u-en Temple in Ch'ang-an, the capital of the Chinese empire. His work is without parallel in the history of translation of Buddhist scriptures. The Ta tz'u-en Temple, now called the Great Wild Goose Pagoda, is the symbol of Hsian City.

Hsuan-chuang translated the Heart Sūtra at Tsui-wei Palace at Chongnan Mountain on 24 May, 649. Early century, the *Tobon-Hontaijion-Hannya-haramitta-shingyo* Chinese-Sanskrit Translation of the Heart Sūtra was found in a stone-cave temple in Tun-huang. The original book is now kept in the British Museum. The text is also contained in the eighth volume of *Taishō-Shinshū-Daizōkyō*, which is the best organised Buddhist canon in the world. This original text includes a preface whitten by Ki, a disciple of Hsuan-chuang. The description under the sūtra title reads; "Since this Heart Sūtra was taught to Hsuan-chuang directly by Kwannon, not a single character has been altered." Even today, the original text of the Heart Sūtra can be restored from the pronunciation of Chinese characters because the original text was transcribed to Chinese characters whose pronunciation is closest to the pronunciation of the original Sanskrit text. In China

Sanskrit texts were often discarded once the Chinese translation was complete. However, the fact that the original text of the Heart Sūtra was kept shows that this sūtra was regarded as special.

Incidentally, a book called *Daitō-Daijionji-Sanzōhoshi-den* ('biography of Hsuan-chuang of Ta tz'u-en Temple in the Great T'ang Dynasty') was written after his death. This book describes vividly how he went over the hot desert alone and how lonely and difficult his journey was. According to this book, Hsuan-chuang could get over this hardship by reciting the name of Kwannon and the Heart Sūtra in his mind. We can assume that the Heart Sūtra, which Hsuan-chuang recited over and over again during his journey, must have been something like the version translated by Kumārajīva. Recently, an American Buddhist scholar, Dr. Jan Nattier of Indiana University, raised a very interesting question. She argues that Hsuan-chuang might have created the Sanskrit Heart Sutra back from its Chinese translation during his stay in India. The fact that the original Sanskrit text is supposed to have been taught by Kwannon herself would seem to support Dr Nattier's argument.

As soon as Hsuan-chuang translated the Heart Sutra, his disciples started studying the translated sutra, which soon became popular among various schools of Buddhism. The attitude of Zen Buddhists in particular towards the Heart Sūtra was notable.

In the era when Hsuan-chuang and his disciples were active, the fifth patriarch of the Zen School Hung-jen and the sixth patriarch Hui-neng were also taking active roles in their school. It was at time that the Zen School dramatically expanded their scope of influence. The Zen School regards meditation as the centre of training. They considered that it was important to understand through this training Buddha's genuine spirit contained in letters and words written in Buddhist sūtras. In the era of Hung-jen and

(34) クインズランド大学アジア言語研究学科フォーラムでの講演報告(池田)

Hui-neng, it was considered that it was necessary to understand the doctrine of 「空」 “Kū”, or emptiness, emphasised in the *Prajñāpāramitā sūtras* such as the Diamond Sutra, in order to deepen understanding of Buddha’s spirit. In the Zen school, the word 「以心伝心」 “Ishindenshin”, which means transmission from mind to mind, is used to describe the practice that a Zen master precisely teaches his disciples in Buddha’s spirit through training to Buddhahood. This practice is regarded as the ideal.

Hsuan chung’s *prajñā pāramitā hṛdaya sūtra* (Heart Sūtra) appeared to be suitable for the Zen Buddhists who were at the threshold of tremendous change. Since the Zen Buddhists placed ultimate importance on understanding the heart of Buddha’s words, they readily accepted the *prajñā pāramitā hṛdaya sūtra* ‘the heart of wisdom’. It was readily accepted because Hsuan chung translated the title of the sutra as 「心経」 “shinkyō” or Heart Sūtra. Previously it had been translated as 「大明呪経」 “daimyōjukyō” or words of great wisdom by Kumārajīva. Thus the emphasis shifted from the words to the heart. Zen Buddhists considered that the Heart Sutra taught the importance of being free from all attachments in order to reach a stage of great wisdom in which one understands the concept of all forms of existence in the world being non-substantial. The significance of the Heart Sūtra which had taken root in China during its long history was first appreciated by Dōgen who introduced Zen teaching from China to Japan at a very early stage. Unfortunately Dōgen is not well known in Australia. However, he is a prominent figure in the history of religion and philosophy in Japan.

The first Japanese Nobel Laureate for literature, Yasunari Kawabata, for example, quoted a waka (Japanese classical poem) by Dōgen in his speech entitled “Japan the Beautiful and Myself” delivered at the award ceremony.

The waka goes as follows :

春は花夏ほととぎす秋は月、冬雪さえてすずしかりけり

*Haruwahana Natsuhototogisu Akiwatsuki Fuyuyukisaetesuzushikarikeri*

flowers in spring

little cuckoos in summer

moon in autumn

cool in winter in bright white snow

Japan's second Nobel Laureate for literature, Kenzaburō Ōe, also quoted Dōgen in a recent speech on environmental issues. He said that when he began to face the reality of having a mentally-handicapped son, Hikaru, Dōgen's teaching helped him understand the importance of accepting fate.

Dōgen explains how to read the Heart Sūtra in the volume entitled *Makahannyaharamitsu* of his collection of writing 「正法眼蔵」 “shōbōgenzō” (Treasury of the correct dharma eye). This volume is well-known as the first annotated edition of the Heart Sūtra written in kana. One of his earliest writings, it is also widely recognized as evidence that Dōgen had an interest in the Heart Sūtra at an early age.

In this volume, Dōgen quoted his Chinese master Ju ching's poem called *Fūrei-ju* or “poem of a bell in the wind” in order to show the essence of the Heart Sūtra. Dōgen was strongly influenced by Ju ching during his five years of training in China between 1223 and 1227.

*Fūrei-ju* originally consisted of 4 lines, each made up of 7 characters :

渾身口に似て虚空にかかる *konshin kuchininite kokūni kakaru*

東西南北の風を問わず *tōzainanboku no kaze wo towazu*

一等に他の為に般若を談ず *ittō ni tanotameni hannya wo dan zu*

滴丁東丁滴丁東 *chichin tsun ryan chichin tsun*

Hanging in the air with my whole body being like a mouth

I shall not care the direction from where window blows

(36) クインズランド大学アジア言語研究学科フォーラムでの講演報告(池田)

giving the teaching of wisdom for anybody, for everybody  
tikle tinkle tinkle

By citing this poem, Dōgen interpreted the four phrases in the last part of the Heart Sūtra as follows. He described the term *parajñāpāramitā*, which literally means perfection of wisdom, as a transcendent wisdom, a great knowledge mantra, a supreme mantra, and an unequalled mantra. Furthermore, he added that this is what buddha and the holy Zen priests have handed down as wisdom or Buddha's compassion to their followers. His deeper interpretation of those four phrases was that our soul and our body encompass wisdom and Buddha's compassion. Other people are composed of this. So, am I. Therefore, we are all blessed with wisdom and Buddha's compassion.

In the Heart Sūtra, the term 「無」 “mu”, which means ‘nothingness’, appears twenty one times ; the term 「不」 “fu” which has a similar meaning, appears nine times ; and the term 「空」 “Kū” (emptiness) appears seven times. Of the 276 characters that appear in the Heart Sūtra, these three terms 「無」「不」「空」 with negative connotations are used altogether thirty-seven times. Whoever tries to comprehend the Heart Sūtra will no doubt have difficulty in interpreting these terms. However, Dōgen did not intend for them to be viewed simply with negative meanings. Instead, he elucidated them as a wisdom which can be expressed in various ways so that anyone can understand.

Unfortunately, I don't have time to give you a detailed explanation about why Dōgen thought that way, but overall what he meant is that this wisdom is nothing more than the compassion of Buddha who is omnipresent like a shadow. As I have explained, in the Heart Sūtra by repeatedly denying everything, Dōgen believed that the seed of wisdom and Buddha's compassion would take root, sprout, grow and finally bloom and bear fruit. What

the Heart Sūtra, is trying to tell us is that we must live in a world of relativity which sets us free from being bound by conventions and preconceived ideas. No matter how hard we work, we shouldn't be too proud of our efforts. In addition, we shouldn't boast of, be too elated with or corrupted by our successes. Therefore, we must live by always trying to expand our own horizons without blindly believing and accepting what we have thought is right.

In closing, let me cite a lesson from the Heart Sūtra Dōgen gave us. Like a wind bell ringing innocently, we should actively participate in life, hand in hand with others, no matter when or where we are.

How do you feel about this?

*Translation of a lecture given by Professor Ikeda at the MAJIT Program Live Interpreting Forum, University of Queensland, Brisbane Australia on 5 March 1998. English translation by chihiro Everett, Kakuji Kamitani, Motoko Kawai and Masami Paton.*